



私のがんワクチン

「生と死を語る会」代表・坂口内科 院長

坂口 健太郎

坂口 健太郎（さかぐち けんたろう）

平成7年より和歌山県紀の川市にて、尊厳死やがんの最後を自宅で迎える在宅ホスピスについて取り上げている「生と死を語る会」を主宰。

『文藝春秋』七月号の「高齢者と抗がん剤の真実」という一文が波紋を呼んでいる。著者は国立がん研究センター理事長の中釜斉（なかがまひとし）さん。日本のがん研究・治療の総本山のリーダーと言える。その彼が商業雑誌に発表した内容を要約すると①七十五歳以上のステージIVの肺がん患者の場合、抗がん剤治療を受けた患者と受けなかった患者の生存期間にはほぼ差がみられなかった。②がんの発生はがん化に関係する遺伝子にキズが付くことで起こり、その確率は一万分の三程度という。これは偶然に左右される部分が大きく、「一万分の三」にキズがつくかどうかは確率の問題であり、どのような場合にがんを発症するかはの予測は現時点では困難である。③がん細胞は一人ひとりのがん患者で異なること。患者自身も

一人ひとり、その体質や病歴、抗がん剤への反応も異なる。だから年齢や、ライフステージに合わせて治療が考慮される時代になりつつある。また、自分の年齢なども勘案して抗がん剤治療を「やらない」という結論を出す患者さんは、ご自身なりの哲学を持つ方が多い。その意味では、人生の意味を考えて治療方針を選択する患者さんには、今回のデータはひとつの判断材料になるかもしれない。また医師の立場からすれば、今までは「告知することの難しさ」に悩んでいたが、今後は「何も治療をしないほうがいいですよ」と説明をするほうが難しい時代になりつつある。④理事長の中釜さんは五年ほど前に奥様を「原発不明がん」で亡くされている。わずか四十日で急逝された。

「今振り返ると、妻の場合、結果的には抗がん剤治療をしなかったほうが本人のためにはよかったと思います。かなり進行の早いがんだったこともあり、薬が急激に体力を奪ってしまった可能性があります。抗がん剤治療が効くのか、効かないのか。副作用が身体にどれくらいダメージを与えるのか。がん研究者である私にもわかりませんでした」

以上が、国立がん研究センター理事長の発表要旨である。

『文藝春秋』といえば、二十年以上も前に近藤誠医師の『患者よ、がんと闘うな』を掲載し、一般市民の目からウロコを落としたものであった。今回は近藤医師が批判の対象とした当事者自身が発言している。どのような議論がなされるのか待ちどろしい。